

マララさんとナビラさんから学んだこと

堀田 絵葉

先日、パキスタンの人権活動家、マララ・ユスフザイさんがアフガニスタンの女性権利活動家と連名で公開書簡を発表しました。事実上の女子教育禁止を撤回するようタリバンに呼びかけ、他のイスラム諸国のリーダー達にも「宗教は女子の就学禁止を正当化しない」とタリバンに明示するよう求めました。その背景には、アフガニスタンで政権を担うタリバンが男子生徒の登校のみを認め、女子生徒が学校に行けていない状況があります。

書簡に添えられた請願書には、世界中から64万筆以上の署名が集まったそうです。教育のために戦い続けるマララさんの姿勢に感銘を受け、わたしも署名しました。そして、マララさんがどのような思いでこれまで活動されてきたのか知りたくなり、図書館で『武器より一冊の本をください—少女マララ・ユスフザイの祈り』という本を借りて読んでみました。

その中で心に残ったのは、マララさんの様々な障害を乗り越えて勉強を継続する姿勢や銃撃にあっても教育の権利を訴え続ける勇気です。そして、それらにも増して印象的だったのは、国連でのスピーチにて「わたしを撃ったタリバン兵さえ憎んでいません。銃を持ったわたしの目前に彼が立っていたとしても、わたしは撃たないでしょう」と語った彼女の心の広さです。銃撃によって生死をさまよったにも関わらず、加害者を許し受け入れるような発言をしたことにたいそう驚きました。それから、その寛容さはどこから来るのかを考えるようになりました。

マララさんに限らず、タリバンによって殺されたり負傷させられたりした子ども達はたくさんいます。例えば、2014年にも、130人以上の子ども達がパキスタンの軍が運営する学校においてタリバンの銃撃により亡くなりました。政府とタリバンの戦いという、自分達には直接関係のない理由で殺された大勢の子ども達や遺族の絶望的な悲しみを思うと、あまりの痛ましさに胸がはりさけそうになりました。

このようなつらい出来事を知り、タリバンに対して激しい憤りを感じていた時、友人に勧められて『ナビラとマララ 「対テロ戦争」に巻き込まれた二人の少女』を読み、新たな視点を得られました。主人公のナビラ・レフマンさんは6歳の時にパキスタンでアメリカ軍がテロリスト襲撃のためにドローンから発射したミサイルによって祖母を失い、自分も大けがをしました。マララさん同様「対テロ戦争」によって深い傷を負った1人であり、その争いを止めるため、男女関係なくイスラム世界の全ての人々に教育が必要だと訴えています。しかし、マララさんがノーベル平和賞を受賞し、世界が彼女の主張に耳を傾ける一方で、ナビラさんを知っている人は多くありません。わたしもこの本を読むまでは全

く知りませんでした。彼女の場合、アメリカの議会でスピーチをしても、彼女の訴えに興味を示した人はほとんどいなかったそうです。この本では、その理由として、マララさんを撃ったのはアメリカの敵であるタリバンだったのに対し、ナビラさん達にミサイルを発射したのはアメリカのCIAだったことが挙げられています。そして、「加害者の違いこそが、彼女たちの訴えが世界に届くかどうかを決めているのです。」と結ばれていました。タリバンはマララさんの殺害を目的にしていたのに対し、CIAは誤ってナビラさん達に被害を与えたという違いはあるでしょう。しかし、それがナビラさん一家に対して謝罪や補償が一切行われていない理由になるのでしょうか。無実の人達を傷つけ、命を奪っただけでなく、代価も払わないアメリカに対して強い不信感を抱きました。せめて、自分達の過ちを認め、ナビラさん一家に対して心からの謝罪をし、誠意のある態度を示してほしいです。

この本で、ナビラさんは「なぜ戦争をするのですか？ なぜたくさんのお金を戦争に使って、教育に使わないのですか？ 戦争で何が解決できるのですか？」と問いかけています。確かに戦争に使うお金を教育に使えば、もっと未来は明るくなるはずです。改めて戦争の愚かさや教育の重要性について考えさせられました。

この2冊を読んで、全ての子ども達に教育を届けたい、という2人の強い信念に感動しました。2人ともおぞましい経験をして負けずに立ち上がり、世界中に勇気を与え続けています。私も2人のように、何をされても自分の信念のために行動し、他の人に勇気を与えられる存在でありたいです。そのためには、まず世界の現状を知り、自分にできる事を考えたいです。そして、今わたしにできる事は限られているかもしれませんが、「毎年のユニセフ募金への寄付を継続する」「友達に自分の考えをシェアする」など、小さな「できる事」を積み重ねて、少しでも2人に近付きたいです。